

シンガポールの言語状況と言語教育について ―現地調査から―

矢頭典枝

1. シンガポールの概要
2. 民族・言語状況、言語政策
 - 2.1 マンダリンと英語への言語シフト
 - 2.2 複層的なポリグロシア社会
 - 2.3 “Speak Good English”運動とそれをめぐる議論
3. 教育制度
4. 現地調査① ―シンガポール国立大学
 - 4.1 2月27日会合 <CLSにおける言語教育とCEFR導入状況について>
 - 4.2 2月28日会合 <CLS フランス語プログラムにおけるCEFR導入状況について>
 - 4.3 3月1・2日会合 <シンガポール英語について>
5. 現地調査② ―南洋工科大学
 - 5.1 3月3日会合 <NIEにおける教員養成言語教育について>
 - 5.2 3月3日会合 <SCCLにおける教員養成言語教育について>
6. おわりに

1. シンガポールの概要

東南アジアのほぼ中心、マレー半島南端の赤道直下に位置するシンガポールは、経済発展が目覚ましい常夏の都市国家として知られる。公用語が4つあるため、正式国名は英語で“Republic of Singapore”、中国語で「新加坡共和国」、マレー語で “Republik Singapura”、タミル語で“சிங்கப்பூர் குடியரசு”と記される。1867年にイギリス植民地となり、第二次世界大戦中は日本に占領され、その後、1959年にイギリス連邦内の自治領となったものの、1963年にマレーシア連邦に加入、1965年に分離独立して建国された。

人口は2014年末現在、約547万人であり(Singapore Department of Statistics 2014a)、ジェトロの調べによれば、2013年度、一人当たりのGDPは54,776米ドルと世界でも上位に入り、国際金融センターランキングは世界第5位、さらに、金融資産100万ドル以上保有する富裕層の割合が6世帯に1世帯、と世界一高い経済大国である。また、日本企業のシンガポールへの進出は近年目覚ましく、アジア諸国のなかで最も日本からの輸出額が多く、在留邦人も3万人を超

え、群を抜いて多い¹。こうしたビジネスの動向だけではなく、シンガポールは観光立国としても注目され、同国に観光目的で訪れる日本人も多い。

軍事力を重視するシンガポール政府は、現在、陸軍約 50,000 名、海軍 9,000 名、空軍 13,500 名の計 72,500 名の軍事従事者を有し、男子は 18 歳より 2 年間の兵役を義務付けられている (Ministry of Defence Singapore 2014)。また、きわめて統制された国家であり、ゴミを公共の場でポイ捨てした場合、初犯では\$300SGD、2 回目以降では\$500SGD の罰金が科せられ、あるいは corrective work order (CWO) も科せられる場合もある。また、地下鉄やバスなど公共交通機関 (Mass Rapid Transit (MRT)) での飲食と喫煙は禁止されており、飲食の場合は\$500SGD、喫煙の場合は\$1,000SGD の罰金が科せられる。

さらに、調和のとれた多民族共存を目指す公共政策の一環として、80%以上の国民が居住する国営の高層住宅団地(Housing and Development Board (HDB))には、一つの民族集団を 1 か所に集中させない綿密な計画に基づいた政策がとられている。



写真① チリ一つ落ちていない地下鉄の駅構内



写真② 典型的な国営の高層住宅団地(HDB)

2. 民族・言語状況、言語政策

2.1 マンダリンと英語への言語シフト

民族別人口は、2014 年現在、中華系 74.3%、マレー系 13.3%、インド系 9.2%、その他 3.3% であり (Singapore Department of Statistics 2014a)、中華系が大多数を占める。シンガポールは、この三大民族を平和裏に共存させるためにそれぞれの民族語—中国語 (マンダリン、シンガポールでは「華語」ともいう)、マレー語、タミル語—を公用語とし、さらに、三大民族を統合するための共通語の機能を果たす言語として英語も公用語としている。公共の看板やポスターはこの四つの公用語で表記される。そのうち、マレー語のみが「国語 national language」として制

¹ 2013 年度、シンガポール、マレーシア、フィリピン、インドへの日本の輸出額は、順に、21,100 米ドル、15,331 米ドル、9,745 米ドル、8,617 米ドルであった。また、在留邦人の数は、同じ順に、31,038 人、20,444 人、17,948 人、7,132 人であった (日本貿易振興会 (ジェトロ) <http://www.jetro.go.jp/world/asia/>)。

定されているが、これはマレー語を公用語とするマレーシアやインドネシアなどの近隣諸国との調和を保つ政策であり、実際には、マレー語は象徴的な役割を担い、国家的儀式に使われるにすぎない。



写真③ 工事現場の危険注意喚起の看板
(4つの公用語で表記されている)



写真④ 非常用ボタンを説明する看板
(4つの公用語で表記されるため看板が大きい)

シンガポールにおける英語の位置づけを Low & Brown (2005)は次のように整理している。

- ①公用語
- ②学校教育の言語(1987年より)
- ③公的部門及び民間部門の「業務言語 working language」
- ④社会の共通語
- ⑤異民族が共通の国家的アイデンティティを表現する言語
- ⑥国際語

英語は国外だけでなく国内のコミュニケーションの言語であり、また、興味深いことに、シンガポールの学校教育では、もともとほとんど誰の母語でもない英語が「第一言語 first language」とされ、三つの民族語は「母語 mother tongue」および「第二言語 second language」とされる。三大民族にとって中立的な立場にある英語は、極めてシンガポールにとって実益と国家統一のツールを兼ね備えた有益な言語であることがわかる。

他方、中華系の言語である「中国語」については、1979年、「スピーク・マンダリン」キャンペーン(Speak Mandarin Campaign)が始まった。これは異なる中国語変種を話す中華系の共通語としてマンダリン(北京語、「華語」ともいう)を推進することを目的とした政策であった。中華系の母語である中国語の諸変種は、話者が多い順に、福建語、広東語、潮州語、などである。マンダリンは、中華系住民にとって中立的な中国語の変種であり、中華系共通語の役割を果たすことが期待された。このため、小中学校における中華系の「母語」教育として「マンダリン」を学習させているのである。当初、この政策は中華系の反発にあった。彼らは、英語以

外に「マンダリン」も学校で学ばなければならなくなったからである。

しかし、この政策が導入されて35年の間、徐々にマンダリンが中華系の共通語として確立し、近年では、表1が示すように、マンダリンが家庭内で最も話される言語となっている。

表1. 家庭内使用言語 (2010年)

英語	マンダリン	他の中国語変種 (福建語、潮州語、 広東語)	マレー語	インド諸語 (タミル語 など)	その他
32.3%	35.6%	14.3%	12.2%	4.4%	1.1%

Source: "Table 47" Census of population 2010, Statistics Singapore より作成

表1は、近年、マンダリンだけでなく、英語も家庭内で話されていることも示す。後述するように、1987年に小学校からの学校教育の教育言語として英語が用いられ、中華系の「母語」教育としてマンダリンが用いられるようになった。建国当時は、ほとんど誰の母語でもなかった英語とマンダリンが、現在では最もインフォーマルなドメイン(domain)である「家庭」にまで入り込んだのである。学校の共通語である言語が子供世代によって家庭に持ち込まれるのである。ここ30年間、英語への言語シフトが特に増加していることが国勢調査で分かった。家庭内で英語を話す国民は1980年には11.6%、1990年には20.3%、2010年には32.3%にまで上昇している(Singapore Department of Statistics 2010)。最新の国勢調査から家庭内使用言語の割合を年齢層別にみた図1は、「見かけの時間」の言語シフトを示す。

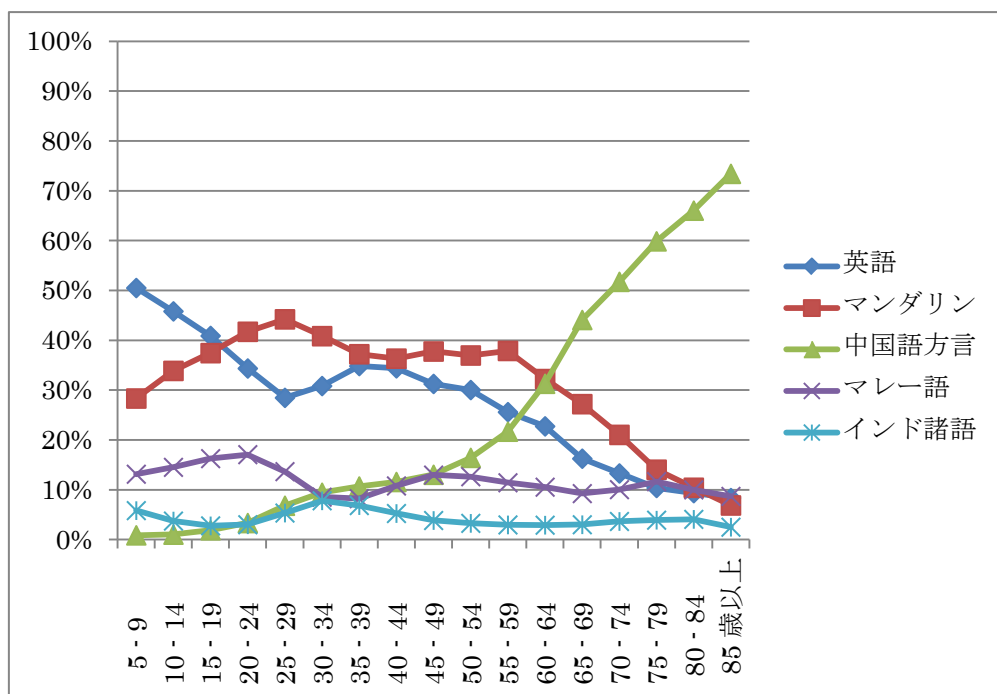


図1. 年齢層別にみる家庭内使用言語

Source: Census of population 2010, Statistics Singapore, table 47 より作成

図1をみれば、人口の約4分の3を占める多数派の中華系は、年齢層が高いほど中国語諸方言を家庭内で話し、年齢層が低いほどマンダリンあるいは英語を家庭内で話す傾向が鮮明に出ている。特に19歳以下の若い中華系は、マンダリンよりも英語の方を家庭内で話す傾向があり、今後この傾向が強まることが予想される。また、学歴が高い家庭ほど、英語が家庭内使用言語となる傾向があることが、2010年の国勢調査で分かった²。

マレー系に関して言えば、三大民族集団のなかで最も「母語」を家庭内で話し、若年層においてもこの傾向が見られる。最も少数派であるインド系は、タミル語をはじめとするインド諸語を家庭内で話す比率は30歳代前後の年齢層を除いて低く、若年層は特に低い。インド系の最も若い年齢層(24歳以下)に英語への言語シフトが観察される。

2.2 複層的なポリグロシヤ社会

このように、シンガポールはPlatt(1977)が提唱した「ポリグロシヤ polyglossia³」社会がますます複雑化していると考えられる。Fishman(1967)はFerguson(1959)が提唱した「ダイグロシヤ (diglossia)」概念を発展させ、「高位(H)変種」はフォーマルなドメインで使用され、「低位(L)変種」はインフォーマルなドメインで使用される⁴、とした。こうした先駆的研究を現在のシンガポール社会の言語使用に適用すれば、複層的なポリグロシヤのモデルが浮かび上がる。

教育レベルが高い人間は、低い人間よりも言語的レパートリーが広い。表2が示すように、高学歴のシンガポール人は英語の変種をドメインによって使い分けている。彼らは、大学や大手企業などのフォーマルなドメインでは「シンガポール標準英語(Standard Singapore English)」を使用し、家族や親しい友達などインフォーマルなドメインではシンガポール特有の「シンガポール口語体英語(Colloquial Singapore English)」、いわゆる「シングリッシュ (Singlish)」を話す。

また、中国語に関しては、通常、フォーマルなドメインでの使用言語ではなく、マンダリンは中華系が小中学校で習う変種であり、最近では家庭でも話されるようになった。他方で中国語諸方言は中高年層の中華系がインフォーマルなドメインで話される変種である。マレー語とタミル語は、マンダリンと同様、小中学校で「母語」として学習する変種であり、同民族間で

² 中華系の家庭内言語を学歴別にみれば、大学卒の49.4%が英語、40.8%がマンダリン、8.9%が中国語諸方言を話す一方で、高卒の31.2%が英語、50.7%がマンダリン、17.7%が中国語諸方言を話す、という結果が得られた (table 56, *Census of population 2010*, Statistics Singapore 2010)。

³ Fergusonが1959年に提唱した「ダイグロシヤ diglossia」(日常の場面(Fishman(1965)が提唱した「ドメイン domain」という語が定着している)に応じて、二つの言語変種(あるいは(Fishmanの拡大解釈によって)二つの言語)が使い分けられている社会を指す)の概念をPlattはシンガポールとマレーシアに適用して発展させ、「ポリグロシヤ polyglossia」という概念を提唱して、複数の言語と言語変種が複層的に使用されているこの二国の言語使用状況を分析した。

⁴ Fishmanは話者と聞き手の役割案系を重視し、「家族」、「友人」、「職場」、「教育」、「宗教」などを「ドメイン domain」として挙げている(Fishman 1965)。また、「職場」というドメインを様々な場合に分けて、さらに下位分類して言語選択を分析した研究もある(矢頭 2008)。

インフォーマルなドメインにおいて話される言語である。

表 2. 高学歴のシンガポール人の言語使用

	H(フォーマルなドメイン)	小中学校で学ぶ母語	L (インフォーマルなドメイン)
中華系	シンガポール標準英語	マンダリン	マンダリン シンガポール口語体英語 中国語諸方言
マレー系		マレー語	マレー語 シンガポール口語体英語
インド系		タミル語	タミル語 シンガポール口語体英語

こうしたポリグロシアのなか、中華系のなかでも多数派を占める福建系の高学歴シンガポール人の言語使用は極めて複雑である。家庭では、高齢者とは福建語を話し、親兄弟とはマンダリンあるいは英語を話す。同民族の友人とは福建語、マンダリン、シンガポール口語体英語のいずれか（あるいはコードスイッチングも観察される）、異民族の友人とはシンガポール口語体英語を話す。小中学校の母語教育ではマンダリンを学び、大学あるいは大手企業の職場では標準シンガポール英語を使う。

低学歴のシンガポール人は、英語のレパートリーが狭く、シンガポール口語体英語しか話せない傾向がある。なお、若年層ほど高学歴である傾向がみられる⁵ため、表 2 は、若年層の多くに特有なマルチリンガルな言語使用であるといえる。

2.3 “Speak Good English” 運動とそれをめぐる議論

このように、シンガポール標準英語とシンガポール口語体英語（「シングリッシュ」）が使い分けられているが、1999年、シングリッシュは当時のゴー・トクチョン(Goh Chok Tong)首相によって排除の対象とされ、“Speak Good English”運動（以下、SGEM）が発足した⁶。これはシンガポール教育省主導で実施され、メンバーには、教育省関係者をはじめ、大学の英語教育学専門家、メディア関係者などが名を連ねる。その使命は、「シンガポール人が世界中で理解される (universally understood) 文法的に正しい英語を話すことを奨励する⁷」ことである。SGEMは2000年に活動を開始し、2004年までは、シンガポール国民に「良い英語 good English」を話す重要性について喚起するとともに、学校教育で標準的な英文法や語彙を教えるキャンペーンを展開し、まず教員を教育した。2005年のキャンペーン開始時にリー・シェンロン(Lee Hsien Loong)首相は、以下のように述べている。

⁵ 2013年、大卒の割合は、25-34歳の層で51.1%、35-44歳の層で43.3%、45-54歳の層で21.8%、55歳以上で7.9%であった(Singapore Department of Statistics 2014b, p.10, Chart 1.9)。

⁶ この運動が発足した一因として、シンガポールの人気テレビドラマで、登場人物が訛りの強いシングリッシュを話し、その話し方が子供たちをはじめとして若年層に広まったことを政府が懸念したことが挙げられている（大原 2002、p.66）。

⁷ SGEMの活動については <http://www.goodenglish.org.sg/site/index.html> を参照。

“ . . . in the real world, whether we are serving customers, making presentations, giving instructions to employees, arguing a case in court, negotiating an agreement, teaching a class, or even singing a song or acting in a TV programme, we are much better off doing so in proper, grammatically correct English. Then we can make our meaning clear, and others can understand us, including non-Singaporeans. If instead we speak in a dialect which only some Singaporeans can understand, then we are handicapping ourselves, and cutting ourselves off from the rest of the world.

. . . .
 So I believe we should all make the effort, and consciously speak good English at home, at work, or in social gatherings. Speaking good English does not mean using bombastic words or adopting an artificial English or American accent. We can speak in the normal Singapore tone, which is neutral and intelligible. But speak in full sentences, with proper sentence structure, and cutting out all the lahs and lors at the end of each sentence⁸.”

リー首相は、様々な社会活動において言いたいことを（シンガポール人以外にも）理解してもらうために「まともな、文法的に正しい英語」を話すことが重要であり、シンガポール国民は、家庭、職場、その他の集まりで「良い英語」を話す努力をしなければならない、と主張している。また「良い英語」とは、仰々しい単語を使うことではなく、また特にアメリカ英語の発音など海外の英語変種を真似ることを意味するのでもなく、「中立的で理解可能なシンガポール英語のトーン」でよい、ただ、文の構造がしっかりした完全な文で話し、シングリッシュの特徴である lah や lors などの間投詞を排除しよう、というのである。

SGEM は 2003 年、毎年、異なるテーマで活動を行うことを発表し、それ以降は表 3 にみられるように、特にターゲットとしたい国民のカテゴリーを決め、その年のテーマで多様な活動を展開している。

表 3. SGEM の年間テーマ名とターゲット

	テーマ	①第一ターゲット、②第二ターゲット、③第三ターゲット、④第四ターゲット
2000-4 年	Speak Well. Be Understood.	①サービス業従事者 ②社会に影響を及ぼす人々（教員や組織の長など）
2005-6 年	Speak Up. Speak Out. Speak Well.	①組織の長 ②接客業従事者（ホテル業、小売業、観光業など） ③青年 (Youth)
2006-7 年	Be Understood.	①親 ②教員 ③接客業従事者 ④青年
2007-8 年	Rock Your World	①青年 ②親と教員 ③接客業従事者
2008-9 年	I Can.	①16-40 歳の国民
2009-10 年	Impress. Inspire. Intoxicate.	①18-29 歳の青年
2010-11 年	Get It Right.	①英語が苦手な国民 ②英語が得意な国民（②が①の模範となるキャンペーン）
2011-12 年	How You Speak Makes A Difference.	①子供たち（の模範になる）

⁸ 2005 年 5 月 13 日に SGEM キャンペーンが発足した際のリー・シェンロン首相（当時、財務相も兼任）のオープニング・スピーチより。

<http://www.goodenglish.org.sg/site/wp-content/uploads/2009/04/about-years05-speeches-20050513-pmlee.pdf>

2012-13 年	Make Good English Stick.	①20-39 歳の国民
2013-14 年	10 Tips To Improve Your English.	①20-39 歳の国民
2014-15 年	Grammar Rules Matter.	特に設定なし

出所：SGEM のホームページより作成

毎年、共通の活動として、SGEM は「良い英語」を話すことについて啓蒙する、あるいはそれを教えるセミナーやワークショップを開催している。また、年間テーマの活動としては、例えば、“Rock Your World”をテーマとした 2007 年度は、音楽や演劇を通して「良い英語」の話し方を奨励した。また、2014 年度は、英語の文法に焦点を当て、SGEM のホームページ上で英文法に関するクイズを掲載する、民間の英語教育企業の無料レッスンを提供するなどの活動を展開している⁹。

SGEM が発足して 15 年を経たが、現在のシンガポールで耳を澄ますと、依然として一般のシンガポール人の多くがインフォーマルなドメインにおいて「シングリッシュ」を話す状況が観察される。Lim, Pakir & Wee (2010)は、言語政策と実際の言語使用にはギャップがあると主張する。つまり、言語政策の有無にかかわらず、「シングリッシュは必然的な現象」¹⁰であり、英語の使用が広まるにつれて、現地特有の英語が発達し、家族や友人との会話などインフォーマルなドメインにおいて最も気軽に話せる変種として社会に浸透するのは自然なことである、と論じる。また、Bruthiaux (2010)は、SGEM は社会言語学的研究に基づかない非現実的な政策として批判し、「もし、SGEM が最もプライベートなドメインにも「標準英語」を浸透させることに成功できるのなら、おそらくそれは世界で初めて、単一コード(single-code)、つまり変種を話さない話者たちの事例となるであろう」と皮肉っている¹¹。

政府主導で展開される SGEM に対し、一般のシンガポール人の態度は微妙であることを示す動きとして、“Speak Good Singlish”運動が観察される。これは民間人が匿名で自発的に展開しているインターネット上の運動で、シンガポール人が自由に自分自身を表現するための手段としてシングリッシュの使用を擁護する立場をとっている。2010 年に“Speak Good Singlish”のウェブサイトが開設されたが、2012 年に停止している¹²ところをみると、彼らは活動しにくい環境にあることが推測される。同様の立場のグループがインターネット上でシングリッシュのオンライン事典などを掲載している¹³。

⁹ 詳しくは SGEM のホームページ <http://www.goodenglish.org.sg/site/index.html> を参照。

¹⁰ Lim, Pakir & Wee (2010), p.9 より。

¹¹ Bruthiaux (2010), p.95 より。

¹² <http://speakgoodsinglishmovement.blogspot.jp/>より。

¹³ <http://www.talkingcock.com/html/index.php> や <http://www.singlishdictionary.com/>など。

3. 教育制度

既に触れたように、シンガポールでは、1987年以降、小学校から英語が教育言語となっている。また、小・中学校では、中華系はマンダリン、マレー系はマレー語、インド系はタミル語を「母語」として学ぶ。興味深いことに、シンガポールの学校教育でいう「母語」とは、通常の意味をもたない。例えば、文字通り、それを母親が話す言語と解釈する社会もあれば、カナダのように「母語 mother tongue」とは「幼少期に家で最初に習得し、現在も理解できる言語」(矢頭、2008、p.48)と政府が定義する国もある。しかし、シンガポールの学校教育では、「母語」は「父親が話す言語」のことを指す。例えば、父親が中華系で母親がマレー系の夫婦の子供であれば、父親の言語であるマンダリンの方を子供は「母語」として学校で学ぶ。

学校における全体の教育言語が英語であり、教科として「母語」を学ぶ子供たちのこうしたバイリンガル状況につき、Pakir (1992)は“English-knowing bilingualism”と称している。三大民族はそれぞれの言語と英語のバイリンガルであり、英語が彼らをつなぐ共通語となっている。教育現場においては実際には英語は「第一言語 first language」、「母語」が「第二言語 second language」であり、大学教育は英語で行われ、学校を卒業すればビジネスの業務言語は英語、という状況にあるシンガポールでは、前節でみた英語への言語シフトは必然的に起こる。

シンガポールの教育制度の特徴として能力別教育が挙げられる。小学校1-4年までの「基礎段階(foundation stage)」を終え、5-6年になると「進路模索段階(orientation stage)」として、習熟度に応じたクラスで学び、小学校卒業試験(Primary School Leaving Examination (PSLE))を受験し、その成績で中学校以降の進路が決まる。成績が最も良いグループはExpress courseで4年間学び、Oレベル(‘ordinary’普通)試験を受けた後、通常、Junior College(高校)に進学し、大学入学資格を得るためのAレベル(‘advanced’上級)を受ける。

Normal courseはアカデミック(A)とテクニカル(T)に分かれている。前者では4年間の学業を修了するとNレベル(‘normal’普通)の試験を受け、成績が良ければさらに1年間の学業を続けて、Oレベルの試験を受ける道があり、大学への進学を探る。そうでなければ、技術教育系の学校に進む。後者のテクニカル・コースは、4年間の学業を修了するとNレベル(‘normal’普通レベル)の試験を受け、成績が良ければアカデミック・コースに編入し、そうでなければ技術教育系の学校に進む¹⁴。

既にみたように、2013年、25-34歳の層で大学卒業の割合が51.1%に達していることからうかがえるように、現在では、半数以上がOレベルの試験を受け、大学への進学を志向しているとみられる。

¹⁴ シンガポールの教育システムについての詳細は Ministry of Education Singapore (2012)を参照。

4. 現地調査① —シンガポール国立大学

シンガポール国立大学(National University of Singapore (NUS))は1905年に設立され、15の学部・大学院の研究科¹⁵を有する総合大学である。2013-14年度、学生数は37,452名(学部生27,391名、大学院生10,061名)にのぼる大規模な大学である。言語教育関係の分野が属する人文社会科学部 Faculty of Arts and Social Sciences (FASS)は、次の研究分野に分かれて運営されている。

- アジア研究：中国語、中国研究、日本研究、マレー研究、南アジア研究、東南アジア研究
- 人文科学系：英語・英文学、歴史学、哲学、シアター研究
- 社会科学系：コミュニケーション&ニュー・メディア、経済学、地理学、政治学、心理学、ソーシャル・ワーク、社会学
- 言語プログラム：12言語 *Centre for Language Studies が直接運営
- 学際的プログラム：ヨーロッパ研究、グローバル研究、アメリカ研究、副専攻としての宗教研究や都市問題研究、など17の分野

本科研の調査では、「言語プログラム」を運営している Centre for Language Studies (CLS)をまず訪問した。CLSは2001年に設立され、12言語の教育を担当している。それらは、アラビア語、バハサ・インドネシア語、中国語、フランス語、ドイツ語、ヒンディー語、日本語、韓国語、マレー語、タミル語、タイ語、ベトナム語であり、一学期に平均して約2,600名が登録している。

4.1 2月27日会合 <CLSにおける言語教育とCEFR導入状況について>

本会合では、CLS所長である Dr. Wai Meng Chan (教授、ドイツ語プログラム)、Ms. I. Wulansari (講師、インドネシア語プログラム)、CLS副所長である Dr. I. Walker (主任講師、日本語プログラム)、Ms. S. Klayklung (主任講師、タイ語プログラム)、Ms. C. Chu Shan-Hui (講師、中国語プログラム)が集まり、シンガポールの言語教育政策を中心に説明してくれた。ポイントは次のとおりである。

- ・シンガポールの教育制度についての説明—これについては本稿3. でまとめた。
- ・本科研の中心的テーマである CEFR (Common European Framework of Reference for Languages (ヨーロッパ言語共通参照枠))の導入に関しては、CLS全体としては導入していないとのことであった。しかし、ヨーロッパ出身の教員はCEFRに準拠した教材を採用することがある。
- ・受講者の多い語学プログラム(2014年度1学期)は以下のとおりである。
 - ①日本語、②ドイツ語、③フランス語、④韓国語(増加の傾向)
- ・CLSの受講者はLanguage Studies(言語プログラム)の学生よりも、ビジネス、工学部、

¹⁵人文社会科学部、法学部、経営学部(ビジネス)、コンピューター学部、歯学部、建築学部、設計・環境学部、工学部、理学部、医学部、公衆衛生学部、音楽学部、公共政策学部、総合理工学大学院、Duke-NUS医学大学院。

ヨーロッパ研究などの学際的プログラムの学生の方が多い。(日本語と中国語のプログラムにはビジネスを目的としたコースある。)

- ・シンガポール人は外国語を学ぶ素質が高い。幼いころから多言語に接しているためだと思われる。
- ・NUS では留学を奨励している。約 40 カ国における約 300 の海外の大学と交換留学制度 (Student Exchange Programme)を確立し、学部生の約 30%が交換留学生として留学している。その他、短期留学、語学研修もあり、学生の約 70%が海外経験をもつ。



写真⑤ Chan CLS 所長と筆者



写真⑥ Wulansari 氏、Walker 氏、筆者、Klaykluang 氏、Shan-Hui 氏

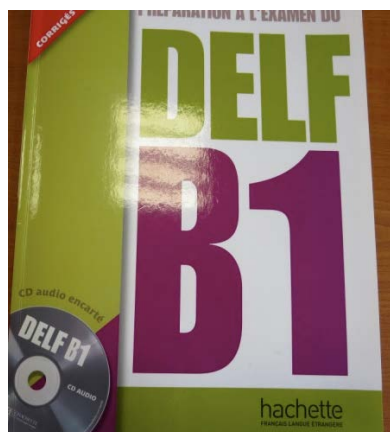
4.2 2月28日会合 <CLS フランス語プログラムにおける CEFR 導入状況について>

前の会合で紹介されたポーランド出身のフランス語教員、Ms. B. Malwina 講師にご自身の授業での CEFR 導入について話を伺った。ポイントは次のとおりである。

- ・正式には、受講者の到達を測るのに CEFR のディスクリプターは利用していない。しかし、フランスに受講者が留学する際は、CEFR の自分のレベルを認識させ、フランスで実際にフランス語のクラスに入る時に役立たせる。
- ・授業では CEFR に準拠したフランスのテキストを採用している (写真⑧)。
- ・CLS フランス語プログラムのコースと CEFR のレベルに対照させると、最も初級である French 1 のクラスは A1、French 2 のクラスは A2-となる。French 1 と 2 の受講者数は 120 名で、4つのクラスに分かれている。別に設けている会話のクラスは少人数制で、13名ずつ、9クラスある。French 3 は A2+、French 4 は B1 である。上級クラスの French 5-6 は B2 - C1 であり、受講者が少なく、毎学期、16 から 25 名が受講している。ヨーロッパ研究やビジネスを専攻している学生が上級クラスを受講する傾向がある。



写真⑦ Malwina 氏と筆者



写真⑧ CEFR に準拠した
フランス語のテキスト

4.3 3月1・2日会合 <シンガポール英語について>

筆者は、「社会言語学的変異研究に基づく英語会話モジュール開発」と題する別の科研事業(基盤研究(B)、課題番号:24320106、以下、「英語モジュール科研」)¹⁶でシンガポール英語会話モジュールの開発を進めている。英語モジュール科研の調査内容は、本科研と深くかかわるので、以下で簡潔に報告するが、シンガポール英語の分析については紙幅の関係上、割愛する。

シンガポール人の言語使用の実態について、Dr. Anne Pakir (英語・英文学学科准教授・国際関係オフィス所長)に話を聞いた。この面談で Pakir 氏が教示してくれた高学歴者のシンガポール口語体英語(シングリッシュ)とシンガポール標準英語の使い分け、シンガポール社会の英語への言語シフト、Speak Good English 運動とそれに対抗する運動などについては、本稿2.でまとめた。

また、Pakir 氏の紹介により、英語・英文学学科で World Englishes の講義を担当している Dr. Joseph Park 氏と面談し、英語モジュール科研のシンガポール英語のスクリプトを書いてくれる学生3名を紹介してもらった。彼らに会い、大学生の日常会話の実態について参与観察する機会を得た。三か月後、シンガポール英語の40会話のスクリプトが完成した。本稿では、そのうちインフォーマルなドメインで「シングリッシュ」が話される一つの会話のスクリプトのみ次に記すに留め、シンガポール英語の分析については、2015年に神田外語大学と東京外国語大学の専用サイトで公開予定である¹⁷「シンガポール英語会話モジュール」に譲ることとする。

¹⁶ 「英語モジュール科研」については、関屋、矢頭、マーフィー(2015)を参照されたい。

¹⁷ 神田外語大学は「KANDA×TUFS 英語モジュール」<http://labo.kuis.ac.jp/module/index.html>、東京外国語大学は「TUFS 言語モジュール—英語」<http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/en/index.html> が専用サイトである。



図2. 「シンガポール英語」会話モジュールの1シーン
(2014年12月現在編集中)

A: So how the movie ah?
 B: Not bad lah. Typical action movie lor.
 A: Ya, I agree.
 B: Eh, by the way, how you going home ah?
 A: Take MRT lah.
 B: Where you stay, eh?
 A: Woodlands.
 B: Fwah, damn far siah! I tumpang you, lah!
 A: No lah, it's okay lah.
 B: No no, I insist. Already quite late.
 A: Sure boh?
 B: Yup.
 A: Okay thanks ah, bro.
 B: No prob.

上記の1シーンの最終版の SCRIPT は、インフォーマルなドメインで繰り広げられる会話であるが、NUS の学生たちが執筆したオリジナルの SCRIPT には、ah、lah、lor、fwah、siah などのシンガポール英語固有の間投詞、tumpang (人を送るという意味 (アメリカ英語では give a ride)、マンダリンで「同伴」) といった語や表現はほとんどなかった。学校では、シングリッシュは「良くない英語」とみなされ、使わないように、という指導を受けているからだ、と彼らは言った。この発言で、筆者は SGEM による統制がかなり厳しい状況を垣間見た。

結局、東京外国語大学での動画撮影時に、出演を依頼した日本在住のシンガポール人たちに、オリジナルの SCRIPT を元しつつ、インフォーマルな場面で普段話しているように自由に会話してもらった結果、上記の SCRIPT の会話が自然に彼らの口から発せられたのである。

5. 現地調査② —南洋工科大学

南洋工科大学 (Nanyang Technical University (NTU)) は、シンガポールの北西に位置する広大な敷地を持つ総合大学である。1991年に設立され、2013-14年度、約33,500名の学生数を有する。「工科」という名称がついているが、人文・社会科学学部もあり¹⁸、NTU内の教員養成学校として国立教育学院(National Institute of Education (NIE))が有名である。本出張では、国民の大多数を占める中華系に焦点を当て、小中学校で中華系の「母語」としてマンダリンを教える教員養成の実態を調査する目的で、NIEの12学科(Academic Groups)¹⁹の一つである「アジア言

¹⁸ 学部として、College of Business、College of Engineering、College of Humanities、Arts and Social Sciences、College of Science、School of Medicine、大学院として Interdisciplinary Graduate School がある。

¹⁹ Asian Languages and Cultures、Curriculum, Teaching and Learning、Early Childhood and Special Needs Education、English Language and Literature、Humanities and Social Studies Education、Learning Sciences and Technologies、Mathematics and Mathematics Education、Natural Sciences and Science Education、Physical Education and Sports Science、Policy and Leadership Studies、Psychological Studies、Visual and

語・文化学科」(Asian Languages and Cultures)、および「シンガポール中国語センター」(Singapore Centre for Chinese Language (SCCL))を訪問した。

5.1 3月3日会合 <NIEにおける教員養成言語教育について>

「アジア言語・文化学科」ではマンダリン、マレー語、タミル語の教員を養成する。その所長である Dr. Goh Yeng Seng に最新のテクノロジーを駆使した教室をはじめ、広大なキャンパス内を案内された。Goh 所長の話は、筆者が NUS の Pakir 氏から聞いた、中華系の英語への言語シフトを裏付ける内容であった。中華系の学生の多くは現在、家庭のなかで、親の母語である中国語諸方言あるいは小中学校での「母語」であるマンダリンではなく、英語を使うようになってきているため、これまでのように教員養成課程でマンダリンを教育言語とした授業を行うのは効率が悪い、ということであった。そこで Goh 所長は、「シンガポール・モデル」として、教育言語をマンダリンと英語の二言語とすることを提唱した。Goh(2011)はこれを「バイリンガル・アプローチ」と称し、その特徴として次の点を挙げている。

- ①主な教育言語をマンダリンとし、英語を補助的教育言語とする。マンダリンと英語の使用の割合は、最初は 70 : 30 とする。マンダリンによる教育に慣れてきたら、徐々に英語を少なくする。
- ②二言語を教育言語として用いることによって、マンダリンと英語の相違と類似性を理解し、メタ言語的な能力を育むことができる。

NIE で 2012 年から始まったこの「バイリンガル・アプローチ」は、その効率性が高く評価され、今後ますます活用されていくと Goh 所長は述べた。

なお、CEFR については NIE としては導入していない、とのことであった。



写真⑨ キャンパス内の長い廊下



写真⑩ 最新のテクノロジー完備の教室
(写っているのは Goh 所長)

Performing Arts である。

5.2 3月3日会合 <SCCLにおける教員養成言語教育について>

シンガポール中国語センター(SCCL)を訪問し、人的資源・戦略マネージャーの Ching Giok (Jane) Koo 氏と面談した。

SCCL は、2008 年にリー・シェンロン首相によって設立が発表され、翌年、その父であるリー・クアンユー内閣顧問 (当時) によって開設された (写真⑫)。教員志望の学生を教育する NIE とは異なり、SCCL はすでに小中学校でマンダリンを教えている教員を対象とした教育 (研修) 機関である。ここでも、NIE の Goh 氏が指摘した中華系家族の若年層の「英語への言語シフト」を懸念し、英語とマンダリンのバイリンガルな教育現場のなかで、マンダリンを家庭言語としない中華系の生徒たちのニーズに応えるための教育方法を模索すべく、様々な研究会やセミナーを行っている。受講者である教員たちは、定期的に「研修」という名目で現場を離れ、年に数日間、SCCL で研修を受ける。Koo 氏によれば、中華系には、中国語どころか、中華文化も知らない子供たちが多いため、研究会では中国の伝統である習字(Calligraphy)、芸能、詩などを取り込む、マンダリンの語彙や表現を楽しい方法で学習させる、などの方法が開発され、セミナーで受講者に紹介されている。こうした SCCL の研究成果は報告書やウェブサイトで配信されている²⁰。



写真⑪ SCCL の正面玄関



写真⑫ リー・クアンユー氏による除幕式を記念した看板

6. おわりに

本科研の中心的な研究の柱である「CEFR の導入の実態」については、NUS も NTU も組織的にはそれを導入していないことがわかった。しかし、NUS ではヨーロッパ出身の教員が CEFR を意識した教育を行っていることが判明した。この点は、筆者が 2010 年にカナダにおいて CEFR 導入についての調査をしたときと同様の状況である²¹。

²⁰ 詳しくは SCCL のホームページを参照。 <http://en.sccl.sg/>

²¹ この研究で現地調査したトロント大学、ケベック大学モントリオール校、オタワ大学では、CEFR を組織的に導入していないことが判明した。しかし、オタワ大学のスペイン出身のスペイン語の教

また、シンガポールの若年層に英語への言語シフトの傾向が強まり、そのため小中学校における母語教育（実際には第二言語教育）の改変が模索されている状況が観察される。マンダリンに関しては、NIE の Goh 氏が提唱する「バイリンガル・アプローチ」が教育現場で定着してきている。今後、この教授法が、マレー語とタミル語の母語教育にも適用されるか、という点にも着目したい。

シンガポールは世界で最も統制された民主主義国家であり、国民の言語使用においてもそれが顕著に見られる。1965 年の独立時に英語を他の三つの民族語とともに公用語に制定し、教育やビジネスなどのフォーマルなドメインにおける高位(H)変種にすることで、シンガポールは英語を共通語とする社会として目覚ましい発展を遂げてきた。また、1979 年に始まった *Speak Mandarin Campaign* により、驚異的な速さで中華系の家庭内使用言語が中国語諸方言からマンダリンに言語シフトしたことを本稿でみた。

現在は、特に中華系の家庭において英語への言語シフトが加速していることも本稿でみた。家庭や友人間で話されるのはいわゆる「シングリッシュ」であることが多いが、2000 年以降の *SGEM* の展開により、インフォーマルなドメインでも「良い英語(good English)」を話すことが奨励されている。

カナダのケベック州においても同州の言語政策によって 1960 年代より「良いフランス語(*bon français*)」を話すことが奨励されてきた。言語政策施行当初は規範として「フランス語のフランス語」が学校教育やメディアにおいて推進されていたが、近年ではケベック独自の規範を模索する姿勢へと変化してきた(矢頭、2005)。現在も同州ではインフォーマルなドメインにおいてケベックのフランス語が話され、メディアなどフォーマルなドメインでも「北アメリカのフランス語」として、それを肯定的に捉える姿勢がケベック州民にみられるようになってきた(矢頭、2013)。本稿で引用した Bruthiaux (2010)が指摘するように、最もインフォーマルなドメインにおいて言語政策を浸透させるのは現実的ではない。シンガポールの言語計画者たちが、社会言語学的研究に基づいた言語現象とどのように向き合い、「シンガポール英語」の規範を模索していくか、という点に今後注目していきたい。

<参考文献・関連サイト一覧>

- Bruthiaux, Paul (2010) "The Speak Good English Movement: A web-user's perspective", in Low, Ee Ling & Adam Brown (2005), *English in Singapore: An Introduction*, McGraw Hill.
- Ferguson, Charles (1959) "Diglossia", *Word* 15 In Giglioli, P. P. (ed.) (1972) *Language and Social Context: Selected Readings*, Harmondsworth, Penguin Books.
- Fishman, J.A. (1965) "Who speaks what language to whom and when?" in *La Linguistique* 2.
- Fishman, J.A. (1967) "Bilingualism with and without Diglossia; Diglossia with and without Bilingualism", *Journal of Social Issues*, volume 23, Issue 2.

員が CEFR に準拠したテキストを使い、CEFR を意識した教育を行っていることがわかった(矢頭、2012)。

- Goh, Yeng Seng (2011) “Using a Bilingual Approach to Train Chinese Language Teachers-A Singapore Model”, 孔子学院、兌第 13 期(2011 年 3 月第 2 期).
- Lim, Lisa, Anne Pakir & Lionel Wee (eds.) (2010) *English in Singapore: Modernity and Management*, Hong Kong University Press.
- Low, Ee Ling & Adam Brown (2005) *English in Singapore: An Introduction*, McGraw Hill.
- Ministry of Defence Singapore (2014), “Our Army-Basic Military Training (BMT),”
<http://www.mindef.gov.sg/imindef> (閲覧日 : 2014 年 12 月 5 日)
- Ministry of Education Singapore (2012), *Education in Singapore*
- Pakir, Anne (1992) “English-knowing bilingualism in Singapore” in Choon, Ban Kah, Anne Pakir & Tong Chee Kiong (eds.) (1992) *Imagining Singapore*, Times Academic Press.
- Platt, John (1977) “A Model for Polyglossia and Multilingualism: with special reference to Singapore and Malaysia”, *Language and Society*, Vol. 6, no.3.
- Singapore Centre for Chinese Language (2014) “Training Courses for Secondary CL Teachers”
- Singapore Department of Statistics (2010) *Singapore Census of Population 2010*.
<http://www.singstat.gov.sg/statistics/census> (閲覧日 : 2014 年 9 月 20 日)
- Singapore Department of Statistics (2014a) “Latest data- Population & land area”.
http://www.singstat.gov.sg/statistics/latest_data.html#14 (閲覧日 : 2014 年 12 月 5 日) .
- Singapore Department of Statistics (2014b) “Education Profile”, *Population Trends 2014*.
- Speak Good English Movement, <http://www.goodenglish.org.sg/site/index.html> (閲覧日 : 2014 年 12 月 5 日)
- 大原始子(2002)『シンガポールの言葉と社会―多言語社会における言語政策』三元社.
- 関屋康, 矢頭典枝, フィリップ・マーフィー(2015)「KANDA×TUFS 英語モジュール ―開発の意義と特徴」『グローバル・コミュニケーション研究』第 2 号, 神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所.
- 日本貿易振興会 (ジェトロ) <http://www.jetro.go.jp/world/asia/> (閲覧日 : 2014 年 9 月 20 日)
- 矢頭典枝 (2005) 「ケベック・フランス語の特殊性と規範化」東京外国語大学グループ<<セメイオン>>『フランス語を探る ―フランス語学の諸問題 III』三修社.
- 矢頭典枝(2008)『カナダの公用語政策 ―バイリンガル連邦公務員の言語選択を中心として』明石書店.
- 矢頭典枝(2012) 「「カナダの二言語併用社会と CEFR 導入状況について ―本科研プロジェクトによる調査から―」平成 21-23 年度 科学研究費補助金研究 基盤研究 (B) 研究プロジェクト 報告書『EU および日本の高等教育における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究』http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/EU_kaken/houkokusho.html
- 矢頭典枝(2013) 「ケベック・フランス語憲章の社会言語学的分析 ―言語計画論と言語選択の視点から―」『ケベック研究』第 5 号, 日本ケベック学会.